

編集室

* 最近は、難しいことを面白く分かりやすく説明することが、学力低下の世の中の正義となっているようだ。専門書籍はもちろん、大学の講義も分からなければ説明が悪いと始めから決まっている。学会の雑誌も御多分に漏れず、読者に読んでもらわないといけないという至上目標を掲げる以上、「サルでも分かる」とまではいかなくとも、「面白く、分かりやすく」と著者へひたすら願うほかない。一方、私が担当している基礎理論が主題となる基礎境界の分野では、「面白く、分かりやすく」というそのこと自体が時には「原価割れしても値下げしろ」にも似たような無理難題となりがねない。

* 私の研究室では、研究テーマに入る前に半年数学の本の輪読をやっている。昨夏いよいよクライマックスとなるある定理の長い難しい証明を終えたとき、「理解するには大変だったが、よく吟味すると大変美しい話ではないか、快感を覚えた人もいるだろう」と学生に問いかけたら、どこかで「マゾか？」というつぶやきが聞こえてきたので、思わず大笑いしてしまった。現にその学生は、難しいといわれる楢岡暗号の研究を自ら選んで頑張っているだけに、「君自身のことを言っているのではないか」と笑い飛ばしたが、考えてみると、学生にとって拷問のごときゼミを毎日楽しんでいる教師こそは、〇〇であろうか。

* そんなことで、いつか聞いた話を思い出した。ある学生が先生に、いろいろと考えたがどうしても分からないと告げたら、その先生はよしここで更に頑張ってもう1時間考えてみると言ったそうだ。後日その先生は、考えても分からないと言っているのに、なおさら考えさせるのはおかしいではないかと非難され、アカデミックハラメントにもなりそうだった。

* この話を聞いたときは、少なからずショックを受けた。「そもそも人間には外界のことを理解することはできまい」

という哲学的立場であれば、始めから教育も勉強もないので、まずそこまで難しく考えなくてよからう。しかし、言われてみると、人間は何で分からないにもかかわらず考え続けるのだろう。「我思う故に我在りき」、考えることは「考える葦」である人間の存在そのものである、と言われても生来の本能とも思えない。人間には確かに幾ら考えても分からないことがたくさんある。それでも人間はずっと考え続けてきた。なぜだろう。無論いやおうなく考え続けざるを得ない場合もあるが、やはり私は考えることは純粋に楽しいからだと思う。分からなくとも、人間の知力の限界を思い知らされながらも、考え続ける。若い人にとっては論理的思考のための集中力と忍耐力も鍛えられる。よしんば答えがなくなるとも、自分なりに作ってしまい、難問に立ち向かう術も磨ける。その喜びは、「意に会するもの有る毎に、便ち欣然として食を忘る」と陶淵明が言う。更に「ユレイカ」のような感激は何ものにも代え難い。暗号のごとき難書を解読し続けた我が研究室の学生には分かっているはずだ（きっと）。

* 実際に学力は低下しても、現代の科学技術はむしろますます抽象難解な道具を駆使するようになってきていることは、基礎境界に限らずすべての分野について言える。「面白く分かりやすく」では当然ペースも悠長なので、日進月歩する技術革新を追いかけるには、格差がますます広がろう。理系離れの流れを食い止めるために、始めは分かりやすく、面白く興味を引き起こすのはよいが、やがて来る孤独な思考に耐えられなければ、考え抜いた後の快感は到底味わえない。

* 大衆誌のような客寄せではなく、面白く分かりやすく、かつ深く広く考えさせること、若手に対してプロに通じる手引きをすることは専門家に課せられる使命であり、学会誌の義務でもある。これこそ大変な難題かもしれないが、考え続けるほかあるまい。

(編集特別幹事 趙 晋輝)